

兵庫県南部地震

犠牲者の霊慰める

神戸文化ホールに一千人

一宗、知恩院と共催で一周忌法要を厳修

浄土宗兵庫教区

六千三百余人の犠牲者を出すなど大きな被害に見舞われた阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）から一年を経て、被災地の浄土宗兵庫教区（貴田康住教区長）では浄土宗（成田有恒宗務総長）と総本山知恩院（牧達雄執事長）の共催で、震災で亡くなった物故者を追悼する阪神・淡路大震災物故者一周忌法要を十九日、神戸市の神戸文化ホールで執り行なった。法要には家族を失った遺族、親族ら約一千人が参集。中村康隆浄土門主の導師により厳かに法要を営み、亡き家族の冥福を祈った。

震災で犠牲となった兵庫教区各寺院の檀信徒は、約四百人。午後一時半からの一周忌法要の会場となった神戸文化ホールは、入り口で手渡された菊花を手にした喪服姿の遺族約一千人で埋まった。会場には浄土宗内局、知恩院内局をはじめ、宗議会議員、知恩院顧問、教区長、教化団長など近畿各教区を中心に一宗の役職者ら多数が参列。一宗挙げて追悼の誠を尽くした。

法要は、同ホールの舞台中央に弥陀三尊が安置され、兵庫教区寺庭婦人会でつくる合唱団の出仕による音楽法要で営まれ、導師を中村康隆浄土門主、脇導師を成田有恒宗務総長、牧達雄総本山知恩院執事長、貴田康住兵庫教区教区長、平井義隆同教区教化団長が勤めた。

法要に先だって、十四日から総本山知恩院を出発し、被災地の神戸まで犠牲者の追悼念仏行脚を続けてきた全国浄土宗青年会、近畿ブロック浄土宗青年会、兵庫教区浄土宗青年会のメンバー約三十人が知恩院大殿で採火したともし火を掲げて会場に入場。舞台に設けられた灯明に火を移して法要が開始された。

法要では、合唱団の「今ささぐ」の歌にのせて、寺庭婦人会の代表が献灯、献香、献華を行なうとともに、中村門主が宝前に進んで表白。また阿弥陀経の読経が流れる中、各寺院檀信徒で犠牲となった全員の名が読み上げられ、各寺院の遺族代表がつぎつぎ菊花を手に舞台上がり、宝前に進んで献華を行ない、亡き犠牲者の霊を慰めた。

中村門主は、会場の遺族、親族に向かって授与十念を行なったあと、垂示にたち、「震災では六千三百余の尊い生命が失われ、一年を経てなお大きな悲しみ抱き苦しんでおられる方々も多い。犠牲となった方々の冥福を祈るために本日、一周忌法要が行なわれ、真心を捧げられることを有り難く思う。法然上人は明るく浄土を目指して生きることを教えられている。お念仏をいのち綱とし、心の支えとして、勇気を奮い起こされるよう念じている。今一度、亡くなられた方々のご冥福を祈り、一日も早い復活を祈念したい」と諭した。

引き続き、成田宗務総長、牧執事長、貴田教区長がそれぞれ挨拶に立った。

成田宗務総長は「本日こうして一周忌法要が営まれ、浄土宗七千カ寺、五百万檀信徒を代表して殉難の諸霊に心から追悼の誠を捧げたい」と追悼の言葉を述べるとともに、「この一年、残されたご遺族の物心両面のご苦労をお察しする。援助の手を差し伸べようと心は傾いているが、手を差し伸べることができず心苦しく思っている。浄土宗寺院も甚大な被害を受け、復興のめどもたちえない状況にある。殉難の諸霊が休まれている寺院の再建こそ、檀信徒の皆さんの心のよりどころの再建だと信じている。被災寺院の復興を今年一年の大きな目標として全力を挙げて進みたい」と決意を表明した。

牧執事長は「人生はどのようなことが起こるか予想がつかないが、人生を歩む道、人生の杖は元祖さまの教えられた念仏以外にはない。苦難を乗り越える道は信仰しかない。仏の力を力として、越え難き道を越え、一日も早く明るい日の来ることを念じたい」と励ましの言葉をおくった。

また、貴田教区長は「世の中は少しずつ震災から遠のいている動きであるように思う。これからは我々が力を携えて立ち直っていこう。昨年三月に挨拶するよう拝命し、何を言おうかと一生懸命考えてきたが、今になっても言葉が見当たらない。亡くなられた方々の冥福を祈る他にはない。未来に向かって頑張っていこう」と会場の遺族らに呼びかけた。

法要のあと、震災復興への応援歌として、震災地で広がる「夢をなくさないで」の歌を作曲したシンガー・ソングライターに加藤良子さんが舞台にたち、加藤さんの指導で参列者が全員で合唱。希望の歌声がホールに広がった。さらに参列者全員が順次、舞台に上り、手にした菊花を宝前に手向けて法要を終えた。

亡くなった家族の冥福を祈って、参列の遺族が菊花を捧げた [写真は省略]

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)